

第一章 ストックの区分

手元の貯えが数日から数週間分しかない人は、それを増やそうとするよりもできるかぎり節約して使い、尽きる前に自ら働いて補おうとする。この場合、収入は労働だけに依存するという実情は、多くの国の働く貧困層に共通して見られる。

手元のストックが数ヶ月から数年の生活費を賄える規模になると、人はその大半を運用して収益を得ようとし、収益が入り始めるまでに必要な最小限のみを当面の消費に残す。したがってストックは二つに分かれ、収益を生む見込みのある部分が資本で、残りは当座の消費に充てる部分である。後者の内容は、第一に当初からこの目的で取り置いた分、第二に出所を問わず徐々に入ってくる収入、第三にそれらで過去に購入し、まだ消費し切っていない品物（衣類や家財など）である。通常、近々の消費のために確保されるストックは、これら三つのいずれか、またはその組み合わせから成る。

資本が所有者にもたらす収入・利益の仕組みは、大別して二通りである。

第一に、資本を投じて作物の生産や製造、商品の仕入れを行い、利ざやを付けて売り直す用法がある。しかしこの資本は、手元にある間や同じ形のままでは収益を生まない。

商人の在庫は売れて現金になって初めて利益となり、現金もまた商品に替わるまで働かない。資本は一つの姿で出て別の姿で戻り、その循環、すなわち連続する交換によってのみ利益が生じる。ゆえに、この種の資本は循環資本と呼ぶのが適切である。

第二に、土地改良や機械・営業用器具の取得のように、所有が移らず、その後の流通もないまま収益を生む用途がある。したがって、この資本は固定資本に分類される。

事業の種類が異なれば、固定資本と循環資本の必要な配分比率は大きく変わる。

例えば、商人の資本は原則すべて循環資本である。機械や取引用具を備える必要はなく、例外を挙げれば店舗や倉庫がそれに当たる程度である。

親方職人や製造業者の資本は、必ず一部が器具や設備に固定されるが、その比重は業種ごとに異なる。仕立屋なら針の束があれば足り、靴職人の道具もそれよりやや高い程度にとどまる一方、織工の設備は靴職人よりかなり高額である。それでも資本の大半は賃金や原材料費として循環し、完成品の販売で利益を上乗せして回収される。

他の事業では、必要な固定資本が一層大きい。たとえば大規模な製鉄では、溶鉱炉・鍛造炉・スリット圧延機などが欠かせず、その導入には莫大な費用を要する。さらに、炭鉱をはじめ各種の鉱山では、坑内排水装置などの機械の方がしばしばそれ以上に高価

3 第一章 ストックの区分

となる。

農家の資本では、農具や機械への投資は固定資本、雇用する働き手の賃金や扶養は循環資本に当たり、前者は保有によって、後者は支出によって利益を生む。労役用の家畜の価格は農具と同じく固定資本で、その飼養費は雇用人の維持費と同様に循環資本であり、農家は役畜の保有とその飼養費の支出の双方から利得を得る。他方、販売を目的に肥育する家畜では、購入費も維持費もいずれも循環資本で、利益は最終的な売却時に実現する。繁殖を営む地域で、羊毛・乳・増頭を見込んで導入される羊群や牛群は固定資本で、利益はそれらを保有し続けることから生じる。維持費は循環資本であり、その支出は羊毛・乳・子畜の売上として戻り、その中に維持費への利得と群全体の資本に対する収益が含まれる。さらに、種子の価値も本来は固定資本である。種は畑と穀倉を往復しても所有者が変わらず厳密には循環せず、利益は種の販売ではなく、その増殖がもたらす収量の拡大から得られる。

いかなる国や社会でも、全体のストックはその構成員すべてのストックの総和である。ゆえに、固定資本・循環資本・当座の消費に回す部分の三つに自然と分かれ、各部分はそれぞれ異なる役割を担う。

第一の部分は、当座に消費するために確保された取り置きで、収入や利益は生まない。その中身は、最終消費者が既に購入しながら未だ使い切っていない食料・衣類・家財などである。ある時点で国内に存在する居住用住宅のストックもこれに含まれる。自ら居住する家に投じた支出は、その瞬間に資本としての性格を失い、所有者の収入とはならない。住居は有用ではあるが、衣類や家財と同様、家計上は費用であって収入ではない。賃貸に供する場合でも家屋自体は生産を行わないため、借り手は労働・資本・土地など他の所得から家賃を支払う。ゆえに家屋は個人には資本として機能し得ても、社会全体の収入を増やさず、国民所得を押し上げない。衣類や家財も同様で、仮装舞踏会の貸衣装、室内装飾業者の家具の月・年貸し、葬儀業者の葬具の日・週貸し、家具付き住宅の賃貸などは個々の収入源になり得るが、その支払いは最終的に他の所得から行われる。当座の消費のためのストックのうち、住宅に投じられた部分の消費が最も遅い。衣類は数年、家具は五十年から百年、堅固に建て維持された家屋は数世紀もつ。時間が長いだけで、家屋も衣類や家財と同じく、当座の消費のためのストックに数えられる。

社会の総ストックは三つに分かれ、その第二は固定資本である。流通や所有者の交替がなくても利益を生むのが特徴で、内訳はおおむね四種類である。

第一に、労働を助けて手間を省き、作業時間を短縮する各種の実用的な産業用機械・器具のすべてである。

第二に、家主に賃料をもたらし、賃料を払って利用する側にも利益を生む建物である。例えば、店舗・倉庫・作業場、農家住宅とその付属施設（厩舎や穀倉など）。これらは純粋な居住用とは異なり、広義の事業用器具として扱い得る。

第三に、土地の改良である。開墾・排水・囲障（囲い込み）・施肥などに採算を見込んで資金を投じ、耕作・栽培に最適な状態へ整えることを指す。改良された農場は、労働を省き時間を短縮する機械と同列に評価でき、同規模の循環資本でも運用者により大きな収益をもたらす。しかも、その利点は機械に匹敵し、耐久性では勝り、しばしば耕作資本を最も利益にかなう形で使うための手入れ以外、修繕を要しない。

第四に、社会の成員が後天的に身につける有用な能力である。教育・学習・徒弟修業の期間には本人の扶養など実費が避けられず、その支出は当人に固定された資本とみなせる。こうした能力は個人の資産であると同時に、社会全体の富の一部でもある。熟練が高まれば、労働を助け工程を短縮する機械や道具に匹敵し、一定の費用はかかっても、最終的には利益とともに回収される。

社会の総ストックは自然に三つに分かれ、そのうちの第三は回転資本（循環資本）である。これは市場を巡る流通の過程で所有が交替することによってのみ収入・利潤を生み、その内訳も四部門から成る。

第一に、貨幣である。貨幣は他の三項目の循環を媒介し、適切な消費者に行き渡らせる配分手段となる。

第二に、肉屋や牧畜家（肥育業者）・農民・穀物商・醸造業者が保有する食料・穀物・酒類の在庫で、その販売が収益源となる。

第三に、衣服・家具・建築に用いる材料の在庫で、未加工の原料から半製品までを含むが、いずれもまだ衣服・家具・家屋という完成品ではない。これらは、栽培者・生産者、製造業者、絹布商や布地商（反物商）、材木商、大工や建具師、れんが製造業者の手元にある。

第四であり最後の要素は、完成しているが商人または製造業者の手元にとどまり、適切な消費者にまだ渡っていない製品である。例えば、鍛冶屋、家具職人、金細工師、宝石商、陶磁器商の店頭に並ぶ既製品がそれに当たる。したがって、循環資本は、各業者の手元にある食料・原材料・完成品と、それらを最終の使用者に流通させるために必要

な貨幣から成る。

四つの構成要素のうち、食料（糧食）・材料・完成品の三つは、毎年、またはそれより短いか長い一定の周期で、順次循環資本から取り出される。取り出されたものは、固定資本に組み入れられるか、当座の消費のための在庫に回される。

固定資本は例外なく循環資本に始まり、その維持にも絶えずそれを要する。各種の機械や業務用具は当初、循環資本で調達され、材料費と製作に携わる労働者の生活費をそれが賄う。さらに、稼働を継続するための日常の修繕や保守にも同種の資本が欠かせない。

どの固定資本も、循環資本なしには収益を生まない。最良の機械や取引用具でも、加工する材料の確保と、それを動かす労働者の生活を支える循環資本が欠ければ、何も生産できない。どれほど改良された土地であれ、耕作や収穫に従事する人を養う循環資本が伴わなければ、収入は得られない。固定資本が利潤を生むのは、常に循環資本を通してである。

当座に消費される在庫を維持し、拡大することこそが、固定資本と循環資本の唯一の目的である。人々の衣食住を支えるのは、この在庫にほかならない。ゆえに、社会が豊

かか貧しいかは、両資本がこの在庫にどれだけ十分に補充できるかで決まる。

循環資本の一部は、絶えず固定資本と即時消費用ストックへ移る。そのため、これに見合う継続的な補給が不可欠で、途切れれば直ちに縮小・枯渇する。主な補給源は、土地の産物・鉱山の産出・漁業の収穫であり、これらは糧食と資材を切れ目なく供給する。その一部はやがて完成品となり、循環資本から常に取り出される糧食・資材・完成品を置き換える。さらに鉱山は、循環資本のうち貨幣で成る部分を維持・拡充するための金銀などの貨幣用金属も供給する。貨幣は平常の商流では他の三項目のように必ず固定資本や即時消費用ストックへ移るわけではないが、物である以上、摩耗・劣化・紛失・海外流出を免れない。ゆえに量は小さいとはいえず、絶え間ない補給が要る。

土地・鉱山・漁業はいずれも、運営に固定資本と循環資本を要し、その産出は利潤とともに、自らの資本のみならず社会の他の資本も更新する。ゆえに農民は毎年、製造業者が前年度に口にした糧食と加工に用いた原料を補い、製造業者は同期間に農民が消費した完成品を補う。これが両者の実質的な交換である。しかし、粗生産物と製造品の直接の物々交換は稀である。穀物や家畜・亜麻や羊毛を売る相手と、衣服・家具・営業用具を買う相手は、多くの場合一致しないからである。したがって農民は粗生産物をつ

たん貨幣に替え、その貨幣で、入手可能な場所から必要な製造品を調達する。さらに土地は、少なくとも一部で、漁業や鉱山に投じられた資本さえも置き換える。魚を水から得ることも、地中の鉱物を掘り出すことも、地表の産物が供給する道具や資材に支えられているからである。

自然の条件が同じであれば、土地・鉱山・漁業の産出は、投入される資本の規模とその配分・運用の適切さに比例する。逆に、資本が同規模で運用の水準も等しいなら、産出は各部門の自然の肥沃度・資源の豊かさに比例して定まる。

相応の安全と法の支配が確保された国では、常識ある人は、手元で動かせるストックを、現在の消費か将来の利得に振り向ける。前者に使えば、それは即時消費用のストックとなる。後者を選ぶなら、資金を手元にとどめて働かせるか、いったん手放して市場で循環させるかのいずれかで利益を得る。前者が固定資本、後者が循環資本である。にもかかわらず、自前資金でも借入でも、使えるストックをこの三つのいずれにも用いないのは、常識にかなわない。

権力者の暴力が日常化した不幸な国々では、人々は常に災厄を想定し、避難の折に持ち出せるよう多くの財を地中に埋めて隠す。この慣行は、トルコやインドスタンをはじめ

めアジアの多くの政体で一般的だとされ、封建制が苛烈だった時代には欧州の社会でも広く見られた。当時、地中で見つけたり特定の権利者を証明できない宝物は埋蔵財宝と呼ばれ、欧州の大君主の重要な歳入源とされたため、勅許状に明文がない限り、発見者や地主ではなく常に君主の所有とされた。扱いは金銀鉱山と同格で、通常の土地の下賜には含まれなかった一方、鉛・銅・錫・石炭の鉱山は相対的に軽んじられた。